古手梨花の受難。

黒蜜柑@暇人オワタ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
古手梨花の受難。

【Ｎコード】
Ｎ０６３１Ｓ

【作者名】
黒蜜柑@暇人オワタ

【あらすじ】
昭和５８年６月。ひぐらしのなく頃に、古手梨花――――私たちは惨劇を越えた。そんな中、羽入が急に行方不明に。あの馬鹿神、どこ行ったの？！

（前書き）

シリアスの皮を被ったコメディー。

昭和５８年６月。

ついに、私たちは惨劇を越えた。

そんな矢先、羽入がまだ納得いかないような顔をしていた。

「羽入、そんな浮かない顔しない。やっと惨劇を越せたんだから。」

「あう…違うのです。」

「何が違うのよ」

「あうぅ…」

「はっきり言いなさいよ！この駄目神！！なんか不満なの？！」

「…なんでもないのです！！」

「羽入っ！！」

羽入はどこかへ逃げてしまった。

…帰ってきたら激辛キムチ＋タバスコの刑ね。

「梨花ちゃん？羽入、どうしたんだ？」

「え？な、なんでもないのですよ！にぱー☆」

本当に、なんなの？羽入（アイツ）…

いきなり不満そうな顔しやがって。

「はう～困った顔の梨花ちゃんかぁいいよぅ～～～
おっ持ち帰りぃぃぃぃぃぃぃ！！」
「みぃ！レナ、さっそく暴走なのですか？！」
「レナァ～止めときな。梨花ちゃま死んじゃうよ～？ほら！おじさんのところに来な！！」

「みんなみんな、お持ち帰りぃぃぃぃ！！！！！！」

「レナさん、暴走しすぎでしてよ！！私までですの？！」
「はうっ！そうなんだよ！だよ！」
「み～、皆、惨劇を越えた喜びで暴走しっぱなしなのです☆」

「はう。羽入ちゃんがいないよ？」
さっきのを見て無かったのか。

「羽入は…新しいゲームを買いに行ったのですよ、きっと。」

えっと、…誤魔化せてる？

「あ、そうなのか？梨花ちゃん、さっきは何でもないって言ってたのにな」
「なんのゲームなのかな？かな？」
「あぁ～東○ｐｒｏｊｅｃｔのゲームとか？あれは名作だよねぇ～」

…なんとか誤魔化せてるようね。単純な人達で良かった。

「…もう、暗くなって来たのです。家族が心配するのですよ。また

明日、ここに集まろうなのです」
「そうだな。よし、じゃー、解散！！また明日！！」
皆さよなら、また明日、気を付けて、と互いに言葉を交わして帰って行った。

さて、私も帰るとするか。

着いた。家に。

けれど、羽入は家にいなかった。

「ったく、あいつ、どこいってんのよ…」
「梨花？どうしましたの？まだ羽入さんのことが気がかりですの？」
「みっ？羽入ですか？…羽入、今日はボクの家に来るって言ってたので、ついてくると思ったのです」
「そうですの？でも、ゲームを買いに行っただけにしては遅いですわね…」
そりゃあ、ゲームなんて買いに行ってないもの。

「…もういいのです。紗都子、お腹がすいたのですよ。もう食べたいのです」
「え？ああ、そうでしたわね！」

それから、ご飯を食べて、お風呂に入って、いつも通りに寝て…
「って、羽入、遅いにも程があるわよ！！！！！！！」
「？！梨花、うるさいですわ！近所迷惑でしてよ！」
「み？！紗都子、ごめんなさいなのです。でも近所はいないのですよ。」
「知ってますわ、そんなことくらい！」

じゃあなんで近所迷惑と言った？

「…紗都子、ボクはちょっと集会所の方に行ってくるのです。」
「どうしてですの？もう夜１０時ですわよ？」
「ちょっと、風に当たりたいのです」
「そう、じゃあ行ってらっしゃいまし」
「すぐ戻るのです！」

羽入のいつもの寝床…
いるかしら？

「いない…」
ここにもいない？

もしかして、羽入がいなくなったんじゃなくて、

私に羽入が知覚できなくなった？

いや、違う。
私は羽入とずっと一緒だった。
誰よりも、一緒にいた。
だから、急に知覚できなくなるわけ…ない。

とりあえず、戻ろう。

皆の家に転がりこんでるかもしれない。
電話して、皆に聞けばいい。それだけだ。

「いない？
…そう、ありがとうなのです」

『梨花ちゃん？羽入、ゲーム買いに行ったまま帰ってきてないのか？』

「はい、そうなのです。羽入の家も訪ねてみましたが、まだ、帰ってきていないそうです」

『他の人の家にいるんじゃないのか？部活メンバーで…』

「いないのです。圭一で最後なのです。」

『そうか…心配だな。明日、皆で探そうぜ！』

「…圭一は心強いのです」

『そうか？ありがとな！じゃあ、また明日！』

「はいなのです。遅くにごめんなさいなのです」

電話は切れた。

もうそろそろ、寝ないとね。

次の日。

「え？羽入ちゃん、まだ見つかってないのかな？かな？」

「はいなのです。」

「ああ、だから今日探すのね。羽入ちゃんのいそうなところは――お菓子屋さんかな？」
「多分、違うのです。羽入は無一文だったのです。」
「それはそれは…」

「山の方、探してみるか？」
「…バラバラに分かれて、後で合流…っていう、いつものパターンですか？」
「え？そうだけど…不満か？」
「はい。…バラバラに別れると、また誰かいなくなる気がするのです…」
「そうか、そういうこともあるよな…
じゃ、皆で同じところを探すか！」

「はい！」

1時間後

「やっぱり見つからない…」
「もうちょっと探してみるかい？」
「そうだね…日が暮れるまで探そう？」

さらに3時間経過

「やっぱり見つからねぇ…」

「もう、暗くなってきちゃった…」

そこに、

「あうぅ〜〜〜

梨花ぁ…お腹が空いたのです…」

「「「「「羽入(ちゃん・さん)!!」」」」」

「羽入!どこ行ってたのよ!」

「あうぅ…あの後、帰ろうと思って…そしたら、いつの間にか道に迷ってたのです…」

「なに凡ミスしてんのよ!!ほら、迷惑かけたんだから、謝りなさい!」

「あうあう。ごめんなさいなのです…」

「いや、見つかってよかったぜ!」

「はう…心配したよう…?」

「うん、無事で何よりだよ！」
「まったく、どこで現（うつつ）をぬかしてたんですの？！」
「あう…」

でも、見つかってよかった。
皆、思いは同じなはず。

？？？おまけ？？？

「羽入、どこいってたの？！それより、なんであんな不満そうな顔してたの？」

「あうあう！お腹が空いたので、村の駄菓子屋さんで駄菓子を買っていたのです！」

「お金も無いのに？！まさか、盗んだんじゃないでしょうね！」

「違うのです！その辺に百円が落ちてたのです！！」

よっぽどな間抜けが落としたのね…

「とにかく！今度からどこか行く時は、私にまず一言言って！！」

「（梨花が心配してくれてるのです！！）はい！なのです！」

「変なことを考えない！！」

「（心読まれましたか？！）はい！なのです！！！！！」

これで羽入失踪（？）事件は解決した。

（後書き）

書いてから気づいた。
長い！！！！！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0631s/

古手梨花の受難。

2011年10月8日18時25分発行